

## 二〇二二年を節目にして

― 戦前と戦後を考える ―

浜田 道雄

二〇二二年は日本が連合国に無条件降伏した一九四五年から七七年目だった。そこでこの「敗戦の年」から時間軸を逆に遡ってみた。すると七七年前は一八六八年、明治維新の年になる。

敗戦前の七七年と敗戦後の七七年、この同じ長さの年月に私達の先人が、そして私達がどんな歴史を作ったかを比べてみるとなかなか面白い。敗戦を境にした二つの時代は、近代日本の歴史においてまったく対照的な年月だった。

明治の新政府は西欧の先進諸国に追いつこうと、「文明開化」「富国強兵」をスローガンに経済社会の近代化に邁進したと歴史教科書は述べている。だがその実は「戦争に明け暮れた七七年」だった。国内の戊辰戦争、佐賀の乱、西南戦争にはじまり、海外での日清戦争、日露戦争、青島事変、シベリア出兵、日中戦争そして第二次世界大戦と戦いのない時期はほとんどなかった。そしてその結果得たものは、惨憺たる国土の破壊と疲弊だけだった。

江戸時代の二百数十年、ほとんど武力を使った争いがなかったことを顧みれば、「明治維新からの七七年」は殺伐であり、好戦的な時代であった。

一方敗戦後の七七年はまったく戦いのない平和な時代だった。私達が国外に送り出した「兵士」は武器を持たない「企業戦士」たちだ。彼らは「エコノミック・アニマル」と揶揄されながらも、優れた商品と技術を抱えて全世界を駆け巡り、日本に経済的繁栄をもたらした。

その結果日本は長い戦争で被った国土の荒廃と損失から完全に立ち直り、明治政府が成し遂げられなかった先進工業国の仲間入りをも果たした。平和国家を標榜し軍事力に頼らなかった「私達の七七年」は明治の富国強兵に対して大いに誇っている。

いま日本はバブル後の長い経済停滞から抜け出せず、苦しんでいる。二〇二三年からの「次の七七年」はこの停滞の克服からはじまらねばならない。来たるべき次世代の「戦士」たちはどのよう  
にこの経済停滞をはねのけ、新しい繁栄の時代を作ってくれるのだろうか。

(この作品は二〇二三年はじめに書かれた)